

ことばの科学研究センター活動報告

梶 茂 樹 *
 吉 田 和 彦 **
 北 上 光 志 **
 鈴 木 孝 明 **
 島 憲 男 **
 森 博 達 ***

要 旨

ことばが内包する世界は奥深い。総合学術研究所ことばの科学研究センターの目的は、日本語を含む世界の諸言語を共時的・通時的に研究し、21世紀におけることば学の新たな可能性を追求することにある。本報告では、令和2年度における本センターの研究成果について概説する。

キーワード：記述言語学，比較言語学，統語論，テキスト言語学，心理言語学

1. ことばの科学研究センターの概要

ことばの科学研究センターは、令和2年4月1日に総合学術研究所に設置された。本研究センターの目的は、本学の言語・文学の研究者を結集し、また学外の研究者の協力を得て、日本語を含む世界の言語と文学に係る諸問題を研究し、21世紀におけることば学の新たな可能性を追求すると同時に、言語と文学に係る多元的な研究を展開することにある。

世界には文字のある言語と文字のない言語がある。言語に文字があれば、通常その言語で書かれた文献がある。しかし文字のない言語には文献がない（ただ他言語話者がその文字で何らかを書き留めることはある）。言語の通時的研究は、過去の文献を持つ言語では行いやすいが、文字がなく文献のない言語でも可能である。それは、現時点での共時的記述を行い、記述対象言語の比較研究により言語の歴史を再構成することができるからである。世界には文字のない言語が多く、むしろこういったやり方を取らざるをえない場合が多い。通時的研究としては、文献のある印欧比較言語学や漢語の歴史的研究などが進んでいるが、その経験と、文字がなく文献のない言語の通時的研究との共通性と相違点を認識し、両者を合わせた総合的研究が必要である。こういった研究はまだ行われていない。

* 京都産業大学現代社会学部

** 京都産業大学外国語学部

*** 京都産業大学名誉教授

同時に、言語の共時的記述が研究のベースとなるため、個別言語の語彙、文法、テキストの地道で緻密な研究が必要となる。さらに、研究において重要な役割を果たすテキスト理解のために、文学、歴史学などとの協同も必要である。また、ヒトの言語産出と理解、およびこれらの獲得に関する仕組みの理解のもとに研究を行うことは、本研究プロジェクトの大きな特徴である。

世界には、印欧語族、シナ・チベット語族、オーストロネシア語族、ニジェール・コンゴ語族など幾つもの語族 (language family あるいは phylum) が存在し、言語としての一般的な共通性を保ちつつも、類型論的構造や歴史が異なる。従って、まず共同研究では、それぞれの研究者が取り組んでいる言語の構造的特徴を対照言語学的に明らかにし、その研究法を開示する。そして、それが他言語の研究にどういう意味を持つかを考察し、その研究法の新たな発展の可能性を探る。さらに、様々な系統的に異なる、あるいは系統的には同じではあっても構造の異なる言語の研究において、その共時的研究のみならず通時的研究においても、研究方法がどう共通してどう異なるかを明らかにする。また、様々な研究におけるテキストの価値、有効性なども明らかにする。

2. 研究体制

本センターは、京都産業大学現代社会学部と外国語学部に所属する教員を学内メンバーとし、また学外メンバーとして京都産業大学名誉教授 (元外国語学部教員) を加えている。それぞれの所属や専門、本センターにおいて果たす役割は以下の通りである。

梶 茂樹 (現代社会学部客員教授)

記述言語学, アフリカ諸語研究

吉田和彦 (外国語学部客員教授)

印欧比較言語学

北上光志 (外国語学部教授)

テキスト言語学の観点からのロシア語アスペクト研究

鈴木孝明 (外国語学部教授)

心理言語学研究

島 憲男 (外国語学部教授)

ドイツ語構文とテキストの研究

森 博達 (名誉教授)

中国語学・日本語学・朝鮮語学, 東アジア語文交渉史の研究

3. 本年度の研究会

本年度は6月24日のオンライン上の事務的ミーティングとは別に、3回の研究会を開催した。各回2つの研究発表が行われた。以下その研究発表の要旨を報告する。

令和2年度第1回研究会

日時：7月22日（水）午後2時から6時まで

場所：第2研究室棟会議室

発表者及びテーマ：

1) 梶 茂樹「共時的言語を通時的に見る：ウガンダ西部のバンツー系諸語の声調に関連して」

ウガンダ西部には北からニョロ語、トーロ語、アンコレ語、チガ語という系統的に近い4つの言語が話されている。いずれもニジェール・コンゴ語族の中のバンツー系の言語である。語彙、文法に関しては共通性が高く相互理解度は高いが、声調に関してはお互い異なる。本報告では、これらの言語における声調体系の歴史的発展を共時的記述により跡付けることを目的とした。これらの言語は、いわゆる無文字言語であり文献はなく、データはすべて報告者が現地フィールド調査により得たものである。なお、考察にはアンコレ語に接してタンザニア領で話される同じ系統のハヤ語も加えた。

ハヤ語を加えた5言語の声調体系は、概ね南から北に行くに従って単純化する。すなわち、ハヤ語が最も声調のパターンが多く、あたかも日本語東京方言のようなn+1型を示し（nは単語語幹の音節数）、そしてそのパターンは単独形でもお互い区別される。その北のアンコレ語とチガ語は同じくn+1型ではあるが、単独形では一部のパターンが中和する。そして、その北のトーロ語は1型、そしてトーロ語の北のニョロ語は2型である（そのさらに北は系統の異なるナイル・サハラ系の言語が話されている）。すなわち、これらの言語の声調体系はハヤ語、アンコレ語・チガ語、ニョロ語、トーロ語の順に単純化していったと推論できる。

2) 北上光志「テキスト言語学の観点からのロシア語副動詞の研究」

ロシア語副動詞はもっぱら文章語で用いられ、テンス・ヴォイス・ムードを表わす形式を持たず、アスペクトを表わす形式（完了体と不完了体）だけを持ち、文脈によって様々な意味を表す。現代の規範文法では、完了体副動詞は動詞の過去語幹から作られ、不完了体副動詞は動詞の現在語幹から作られる。ところが、18世紀から19世紀にかけて完了体副動詞において現在語幹と過去語幹の両方を有している副動詞が多く文学作品で用いられている。同一アスペクトで時制の対立のない完了体副動詞二形（完了体副動詞現在形と完了体副動詞過去形）は入れ替えても意味は変わらない。にもかかわらずこの二形の使い分けがなされている。この使い分けについての従来の研究は不十分である。この問題をテキスト言語学および意味論の観点から分析、考察し、次のことを明らかにした：完了体副動詞現在形は、完了体副動詞過去形よりも、物語の山場に多く用いられ、また、意味的他動性の弱い動詞から作られている。このことにより、テキスト言語学と意味論の研究に新たな可能性を提示することができた。

令和2年度第2回研究会

日時：10月7日（水）午後2時から6時まで

場所：第2研究室棟会議室

発表者及びテーマ：

1) 吉田和彦「比較言語学の陥穽」

ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$, ヒッタイト語 $-(h)ḥaḥat(i)$, リュキア語 $-\chi a g \acute{\alpha}$ という1人称単数中・受動態過去語尾は一見したところ規則的に対応し、基本語尾 $*-h_2e$ が反復した $*-h_2eh_2e$ という祖形に遡るように思える。しかしながら、これらの3つはそれぞれの言語内部の歴史のなかで二次的につくられた形式である。その主たる理由は、基本語尾 $*-h_2e$ が反復される形態変化は後期ヒッタイト語の時期に顕著にみられるが、反復語尾だけでなく非反復語尾も存続しており、両者のあいだには機能的差異がないことにある。もし印欧祖語やアナトリア祖語の時期に反復語尾がつくられていたと想定するなら、数千年もしくは1千年以上にわたって反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このようなきわめて進行速度の遅い言語変化は想定できない。

もとより祖語の再建という目標に向けて、比較方法がきわめて重要な役割を果たすことは言を俟たない。そして、比較方法を適用するときに、祖語の特徴をできるだけ多く導き出したいという思いに駆られることもある。しかしながら同時に、比較方法には限界があるということを認識する必要がある。

2) 島 憲男「ドイツ語の構文研究：結果構文のネットワーク構造を中心に」

発表者がこれまで分析をしてきたドイツ語の諸構文の中から「結果構文」を中心に取り上げた。結果構文内で仮定した計8種のサブタイプの構造を提示するとともに、サブタイプ間を有機的に関連づける関係性を提案した。具体的には、結果構文は「他動詞型のコード化」と、「自動詞型のコード化」に大別される一方で、構文中の主動詞に注目すると、他動詞領域にも自動詞領域にも生起するため、2つの領域の間に関連性を視野に入れ、(a) 結果構文の中に生起する形容詞（結果述語）[・対格目的語]・主動詞がそれぞれどのような文法の変化を被るのか、(b) 結果構文中の結果述語はどのような機能を有しているのか、(c) 結果構文という統一的な文法的範疇の中で他動詞領域と自動詞領域はどのように互いに結びついていると考えられるかについての研究結果を提示した。同時に、「結果拳述の目的語（被成目的語）」や「同族目的語」との関係にも触れ、構文横断的に観察されている他動詞・自動詞領域に渡って存在する構文間の関連性・連続性にも言及した。

令和2年度第3回研究会

日時：11月25日（水）午後2時から6時まで

場所：第2研究室棟会議室

発表者及びテーマ：

1) 森 博達「『日本書紀』区分論と仏教漢文」

まず自己紹介を兼ねて、日本書紀区分論についての私見を纏めた。書紀30巻は表記の性格によっ

て α 群・ β 群・巻30に三分される。その文章には仏教漢文の影響も見られる。

仏教漢文の語法特徴の中で、書紀に現れている特徴は、⑥四字格・⑦排除の介詞「除」・⑧受身「所V」・⑨完成態「V已」・⑩「SN是」式判断句・⑪原因の「～故」である。②③⑤⑦⑩は β 群に、①④⑥⑧⑨⑪は α 群にそれぞれ偏在していた。この他、 β 群に偏在する4種の奇用、「因以（接続詞）」「有～之情」「V之日」「爰（助詞）」も仏典表現であることが分かった。

私見では β 群の述作者は山田史御方である。御方は新羅に留学し、帰国後還俗して大学で教えた。仏教漢文の存在は彼の経歴からも首肯される。一方、 α 群の仏典表現や誤用・奇用は特定の記事に集中する。 α 群は本来、正格漢文で綴られた。しかし編修の最終段階で、三宅臣藤麻呂が α 群を中心に特定の記事に加筆した。御方と同じく藤麻呂も移民系氏族であるが、その文章から仏典に親しんでいたことが分かる。

2) 鈴木孝明「日本語の格をめぐる母語獲得研究」

動詞意味獲得の初期段階において、子どもは統語的情報を利用するという統語的ブートストラッピングの仮説を日本語で検証した。英語を母語として獲得する子どもは、使役または非使役事象を提示しながら他動詞文または自動詞文に含まれる造語動詞を学習させると、他動詞と使役、および自動詞と非使役を結びつけることができると報告されている。項の脱落が許される日本でも統語的情報から動詞の使役性を学習できるのかどうかダイアログ法による調査を行なったところ、日本語を獲得する27ヶ月児は、他動詞文と使役、および自動詞文と非使役を結びつけることができただけでなく、主語が省略された「XをV」のような他動詞文も使役と結びつけることができた。これらの結果は、統語的ブートストラッピングの普遍性を示しているだけでなく、日本語特有の手がかりである格助詞を利用した動詞の意味学習が比較的早い時期から行われている証拠だと考えられる。この他、近年、私が行ってきた日本語の格をめぐる母語獲得研究についての概略を発表した。

4. まとめ

令和2年度にスタートしたことばの科学研究センターは、その活動の多くをフィールドワーク、学会活動など、海外で予定していたが、新型コロナウイルスの世界的蔓延のため多くが実現できず、主として国内での活動に留まった。ただし国内での活動は活発に行われ、今年度の研究では、1編の編著書、13編の研究論文が公刊され、9報の研究発表が行われた。本センターにおける研究成果は未発表のものが多く、今後も続けて研究成果が著書、学術論文、学会発表などの形で発表される予定である。国内で唯一、記述と文献による言語の総合的研究を標榜する研究センターとして、コロナ禍も一段落するであろう次年度は本センターの活動を一層活発化させ、本学における教育・研究に貢献していきたい。

5. 研究業績

(1) 学術論文・著書

1. Kaji, Shigeki 2020. "Language Endangerment in Africa." In Toru Okamura and Masumi Kai (eds.) *Indigenous Language Acquisition, Maintenance, and Loss and Current Language Policies*. Hershey: IGI Global. pp.53-65.
2. Kaji, Shigeki 2021. "High Tone Deletion and Coreferential Objects in Nyoro Verb Conjugations." *Acta Humanistica et Scientifica, Universitatis Sangio Kyotiensis* 54: 269-310.
3. 梶 茂樹 (編) 2021. 『アフリカ諸語の声調・アクセント』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 梶 茂樹 2021. 「序論」梶茂樹 (編) 『アフリカ諸語の声調・アクセント』所収. pp.1-26.
5. 梶 茂樹 2021. 「テンボ語の声調—そのパターンと文法的機能—」梶茂樹 (編) 『アフリカ諸語の声調・アクセント』所収. pp.109-140.
6. 梶 茂樹 2021. 「ニョロ語の声調」梶茂樹 (編) 『アフリカ諸語の声調・アクセント』所収. pp.141-162.
7. Yoshida, Kazuhiko 2020. "Inferring Linguistic Change from a Permanently Closed Historical Corpus." In Richard D. Janda, Brian D. Joseph, and Barbara S. Vance (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics Volume 2*. Oxford: Wiley/Blackwell Publishers. pp. 196-213.
8. Kitajo, Mitsushi 2020. "Анализ своеобразного употребления деепричастий совершенного вида в русских литературных произведениях XVIII-XIX вв." *Осенние коммуникативные чтения*. Российский Новый университет. pp.96-111.
9. Kitajo, Mitsushi 2020. "Колебание в употреблении видов русского глагола (включая деепричастие) в рамках конструкции прямой речи в литературных произведениях XIX-XX вв." *Взаимодействие аспекта со смежными категориями*. Издательство РГПУ им. А.И.Герцена. pp.167-177.
10. Kitajo, Mitsushi 2020. "Анализ конструкции прямой речи с точки зрения лингвистики текста и концепции семантической переходности." *The American scholarly journal Cross-Cultural Studies: Education and Science (CCS&ES)* Vol.5, Issue 3. pp.133-145.
11. 鈴木孝明 2020. 「絵本の文法—日本語の絵本テキストにおける文法の複雑さと多様性—」『読書科学』61巻, 3-4号, pp. 154-164.
12. Suzuki, T., and Nomura, J. 2020. "Mental state verbs used by mother-child dyads in Japanese and English: Implications for the development of Theory of Mind." *First Language* 40(1): 84-106.
13. 森 博達 2020. 「『日本書紀』区分論と記事の虚実」『季刊邪馬台国』138号, pp.58-73.
14. 森 博達 2020. 「漢字学この一冊 有坂秀世著『國語音韻史の研究 (増補新版)』」日本漢字學會『学会通信漢字之窓』3号, pp.48-49.

(2) 研究発表

1. 梶 茂樹「共時的言語を通時的に見る：ウガンダ西部のバンツー系諸語の声調に関連して」ことばの科学研究所令和2年度第1回研究会. 2020年7月22日. 京都産業大学.
2. 梶 茂樹「スワヒリ語の ndiyo 「はい」 の由来に関するニョロ語からの考察」スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ 令和2年度第2回研究会. 2020年11月28日. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 吉田和彦「比較言語学の陥穽」ことばの科学研究所令和2年度第2回研究会. 2020年10月7日. 京都産業大学.
4. 北上光志「テキスト言語学の観点からのロシア語副動詞の研究」ことばの科学研究所令和2年度第1回研究会. 2020年7月22日. 京都産業大学.
5. 鈴木孝明「日本語の格をめぐる母語獲得研究」ことばの科学研究所令和2年度第3回研究会. 2020年11月25日. 京都産業大学.
6. 島 憲男「ドイツ語の構文研究：結果構文のネットワーク構造を中心に」ことばの科学研究所令和2年度第2回研究会. 2020年10月7日. 京都産業大学.
7. 島 憲男「ドイツ語の構文研究：構文のネットワーク構造解明を目指して」. 外国語学部 第2回研究交流会. 2021年2月24日. 京都産業大学.
8. 森 博達「仏教漢文と『日本書紀』区分論」第123回訓点語学会. 2020年10月18日. オンライン研究発表会.
9. 森 博達「『日本書紀』区分論と仏教漢文」ことばの科学研究所令和2年度第3回研究会. 2020年11月25日. 京都産業大学.

(3) その他

1. 森 博達「日本誕生 知られざる物語 日本書紀1300年」『歴史秘話ヒストリア』ビデオ出演. 令和2年11月25日 NHK 総合テレビ.
2. 森 博達「聖徳太子シンポジウムー聖徳太子信仰と伝承ー」パネルディスカッション参加. 令和3年2月28日, 奈良県主催, 於いかるがホール.

Center for Language Studies: Research Activity Annual Report 2020

Shigeki KAJI
Kazuhiko YOSHIDA
Takaaki SUZUKI
Norio SHIMA
Mitsushi KITAJO
Hiromichi MORI

Abstract

The Center for Language Studies was established as one of the research centers in the Institute of Comprehensive Academic Research of Kyoto Sangyo University in 2020. The center devotes effort to comprehensive research of languages of the world from both a synchronic and a diachronic perspectives. Especially we study the mechanism of historical language change, syntactic and semantic properties of verbs, text linguistics, language development of children, and language contacts. Here we report the progress of our research in 2020.

Keywords : descriptive linguistics, comparative linguistics, syntax, text linguistics, psycholinguistics, language contact